

# にんじんの需給動向

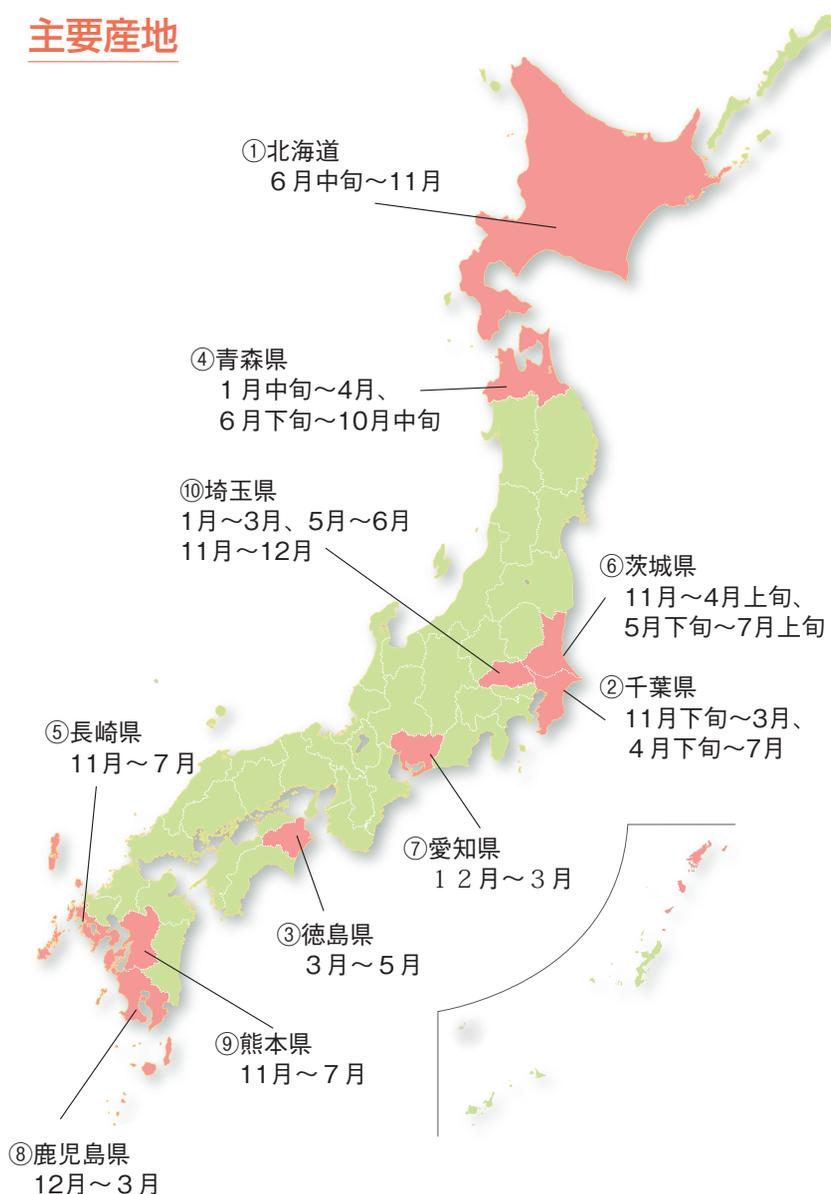
## 主要産地



紫にんじん



ミニキャロット



資料：農林水産省「野菜生産出荷統計（令和3年産）」

注：図中の番号は収穫量の多い順番、期間は主な出荷期間を表している。

にんじんは、江戸時代に中国から入ってきた東洋種と、明治時代に入ってきた西洋種の大きく2つに分けられる。栽培期間が短く、収穫作業のしやすい短根であることから、現在は西洋種の栽培が多く、「五寸にんじん」が主流となっている。東洋種で現在一般的に流通しているのは「金時にんじ

ん」と呼ばれる品種で、甘みが強く、肉質が柔らかい特徴がある。また、外側が紫色で甘みが強くアントシアニンを多く含む「紫にんじん」や、長さ10センチほどの小型種で皮ごと食べられ、そのままの形でスティックサラダなどに利用できるとして人気がある「ミニキャロット」などもある。

## 作付面積・出荷量・単収の推移

令和3年の作付面積は、1万6900ヘクタール（前年比100.6%）と、前年に比べてわずかに増加した。

上位5県では、

- 北海道 4540ヘクタール（同 100.7%）
- 千葉県 2900ヘクタール（同 98.3%）
- 青森県 1260ヘクタール（同 105.0%）
- 徳島県 937ヘクタール（同 95.5%）
- 茨城県 878ヘクタール（同 105.7%）

となっている。

令和3年の出荷量は、57万5500トン（前年比109.4%）と、前年に比べてかなりの程度増加した。

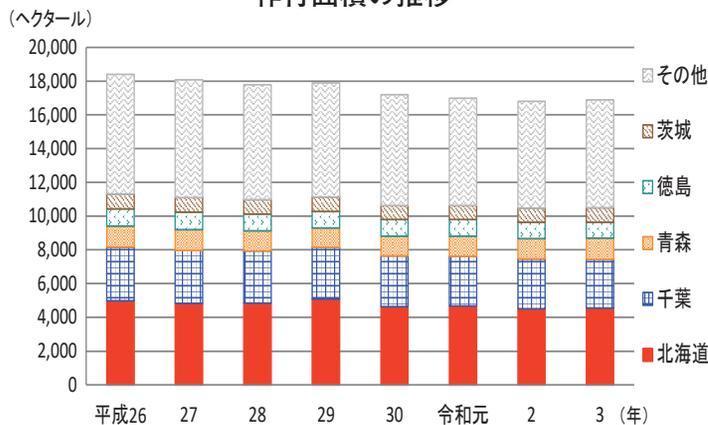
上位5県では、

- 北海道 19万1000トン（同 111.8%）
- 千葉県 10万4900トン（同 107.0%）
- 徳島県 4万5700トン（同 101.1%）
- 青森県 3万9900トン（同 107.8%）
- 長崎県 3万 400トン（同 104.8%）

となっている。

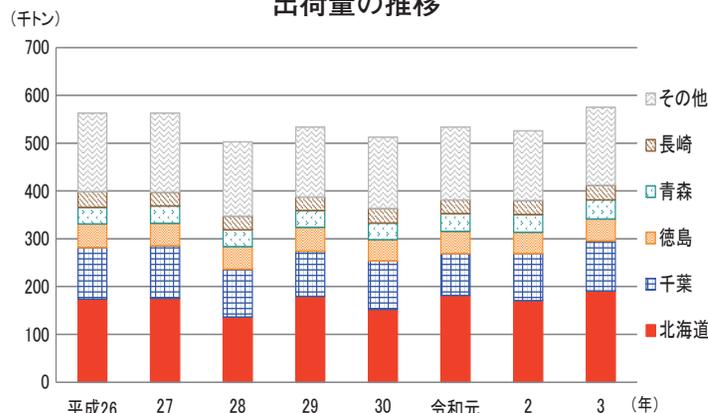
出荷量上位5道県について、10アール当たりの収量を見ると、徳島県の5.33トンが最も多く、次いで北海道の4.51トン、長崎県の4.04トンと続いている。その他の県で多いのは、愛知県の5.53トン、和歌山県の3.87トンであり、全国平均は3.78トンとなっている。

### 作付面積の推移



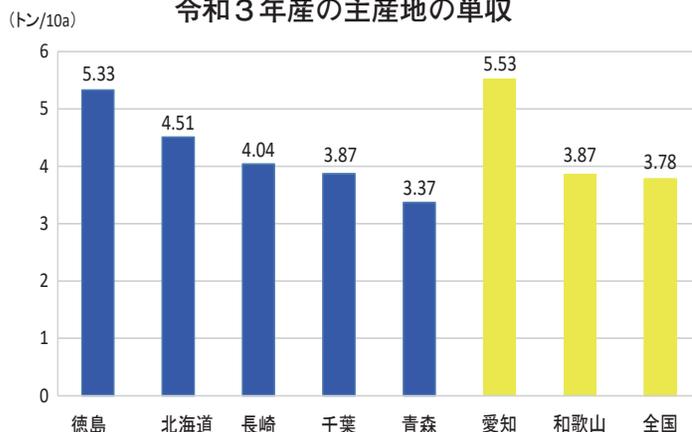
資料：農林水産省「野菜生産出荷統計（令和3年産）」

### 出荷量の推移



資料：農林水産省「野菜生産出荷統計（令和3年産）」

### 令和3年産の主産地の単収



資料：農林水産省「野菜生産出荷統計（令和3年産）」

注：黄色は、出荷量上位5道県以外で単収が多い2県および全国平均。

## 作付けされている主な品種等

主産地では、極早生種の「愛紅」や早生種の「彩誉」「向陽二号」といった、濃紅色の品種が多く作付けされている。健康志向とも

相まった「カロテンが豊富で匂いの少ないものを」というニーズに沿って、最近はにんじん特有の匂いが少なくなっている。

都道府県名	主な品種
北海道	晩抽天翔、天翔、向陽二号
千葉県	彩誉、愛紅、れいめい、らいむ、ベータ441
徳島県	彩誉、FSC015、愛紅
青森県	紅吉、彩誉7、向陽二号、紅福、恋夏、紅寿
長崎県	愛紅、紅ひなた、敬紅ゆうべに 彩誉、翔馬、向陽

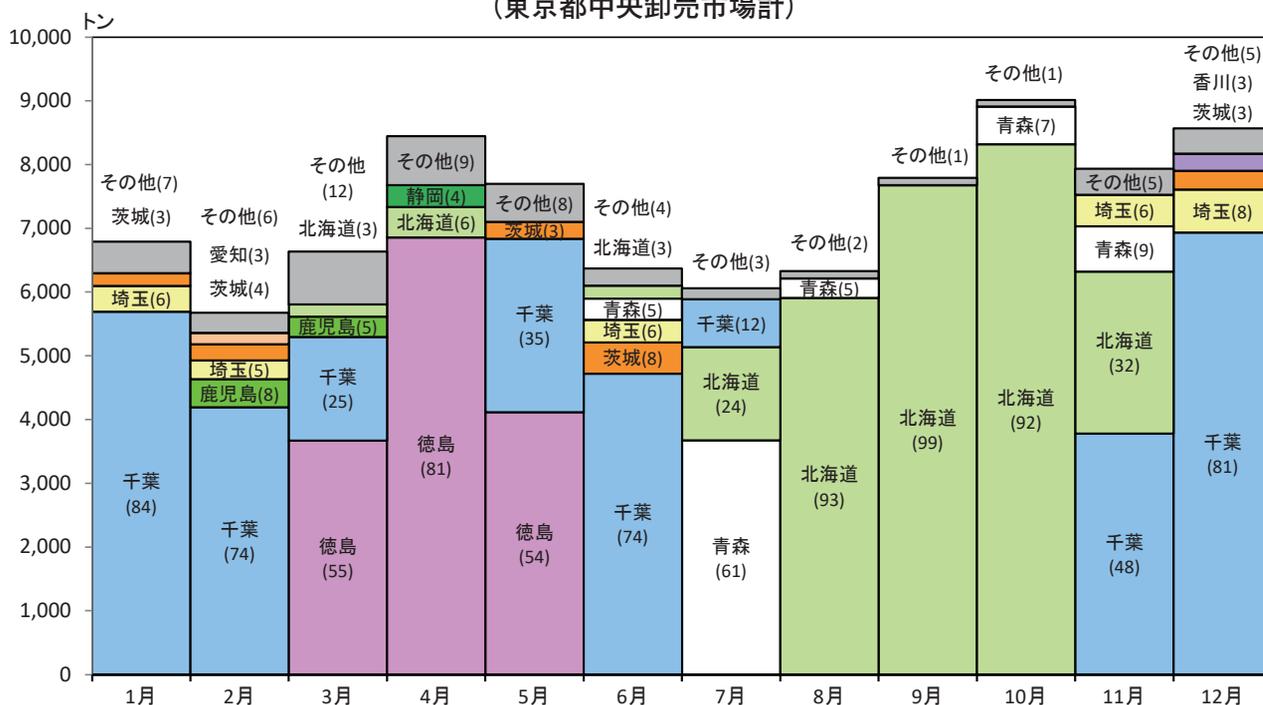
資料：関係者聞き取りにより農畜産業振興機構作成

## 東京都・大阪中央卸売市場における月別県別入荷実績

東京都中央卸売市場の月別入荷実績（令和3年）を見ると、11月～翌2月にかけては千葉産が中心で、埼玉産、茨城産などの近在からの入荷が続き、3～5月は徳島産が中心

の入荷となった。6月は再び千葉産などの近在からの入荷となり、7～10月は北海道産、青森産が中心となった。

令和3年 にんじんの月別入荷実績  
(東京都中央卸売市場計)



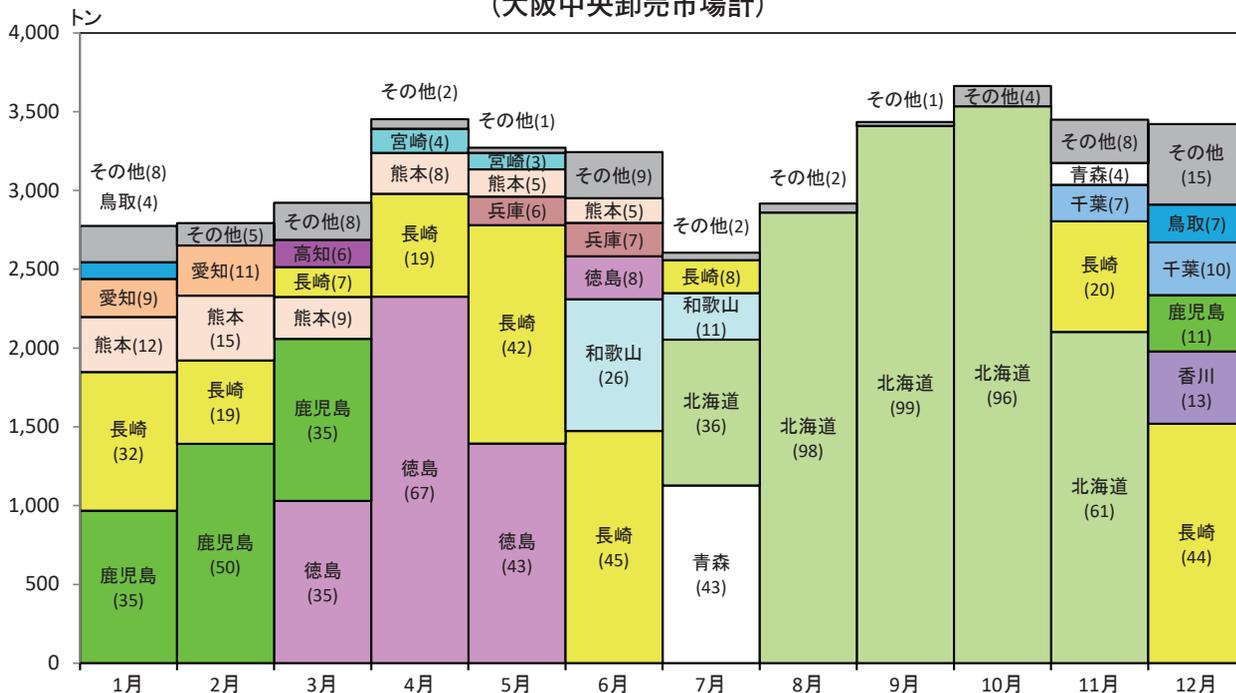
資料：農畜産業振興機構「ベジ探」（原資料：令和3年東京都中央卸売市場年報）

注：（）内の数値は、月別入荷量全体に占める割合（%）である。

大阪中央卸売市場の月別入荷実績（令和3年）を見ると、12月～翌2月までは長崎産、鹿児島産が増え、3～5月は徳島産が入荷し、

6月は長崎産、和歌山産が中心となり、7月は北海道産、青森産が入荷し始め、8～11月は北海道産が大部分を占める。

令和3年 にんじんの月別入荷実績  
(大阪中央卸売市場計)



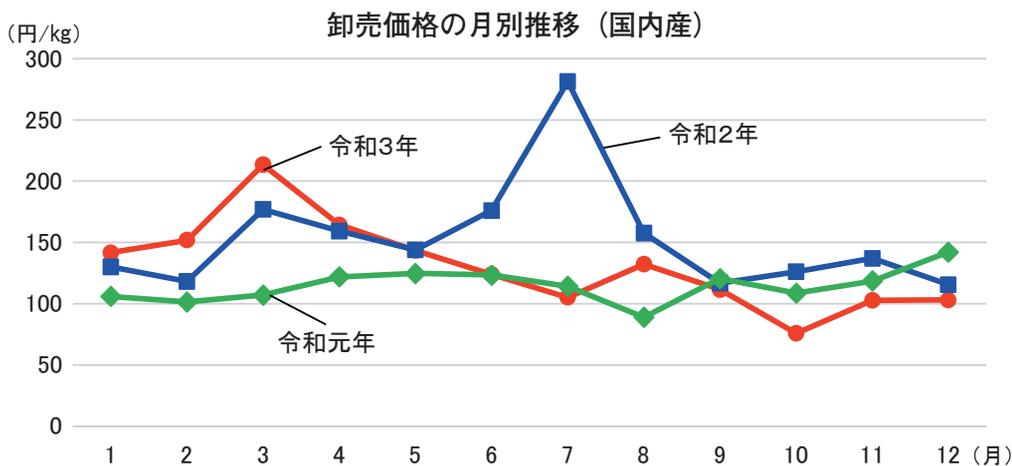
資料：農畜産業振興機構「ベジ探」（原資料：令和3年大阪市・大阪府中央卸売市場年報）  
注：（ ）内の数値は、月別入荷量全体に占める割合（%）である。

## 東京都中央卸売市場における価格の推移

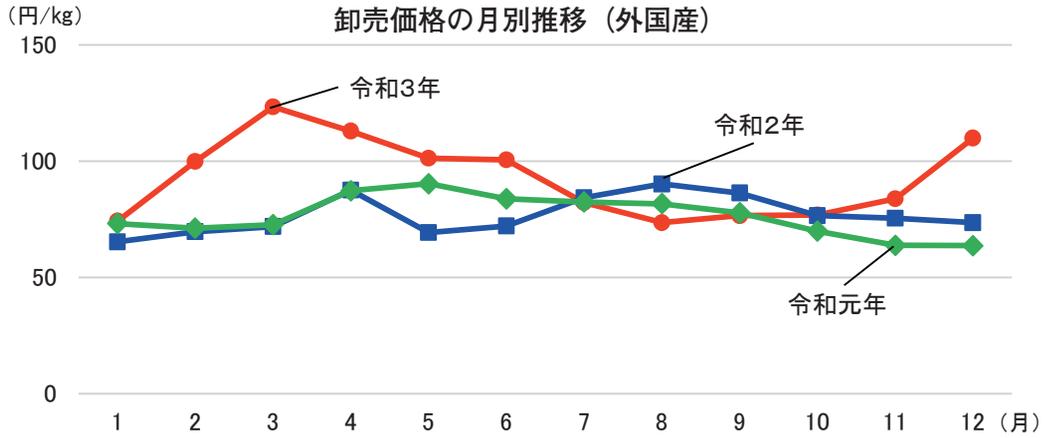
東京都中央卸売市場における国内産のにんじんの価格は、1～3月にかけて上昇し、夏場にかけて下落する傾向があるが、令和2年は、北海道産の作付け減に加え干ばつで遅れたことや、青森産の曇雨天による生育遅延な

どにより夏場に高騰した。

同市場における外国産の平均価格（令和3年）は92.1円で、国内産価格（130.9円）の7割程度となっている。



資料：農畜産業振興機構「ベジ探」（原資料：東京都中央卸売市場「市場月報」）

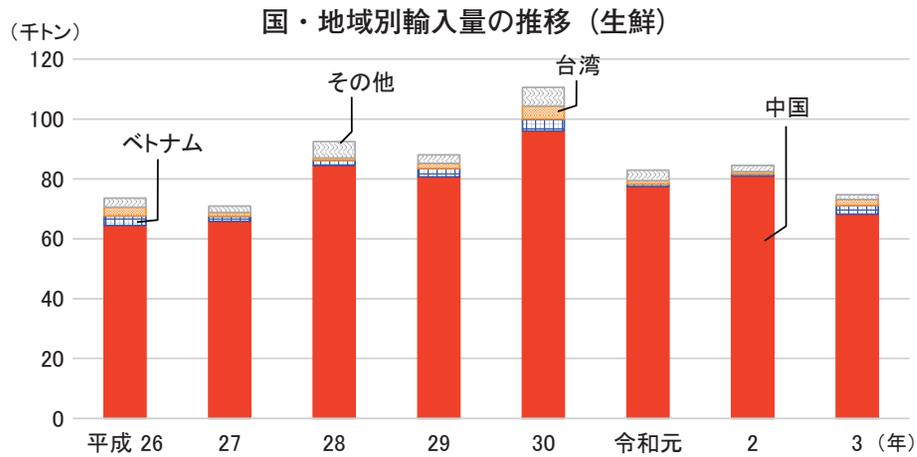


資料：農畜産業振興機構「ベジ探」（原資料：東京都中央卸売市場「市場月報」）

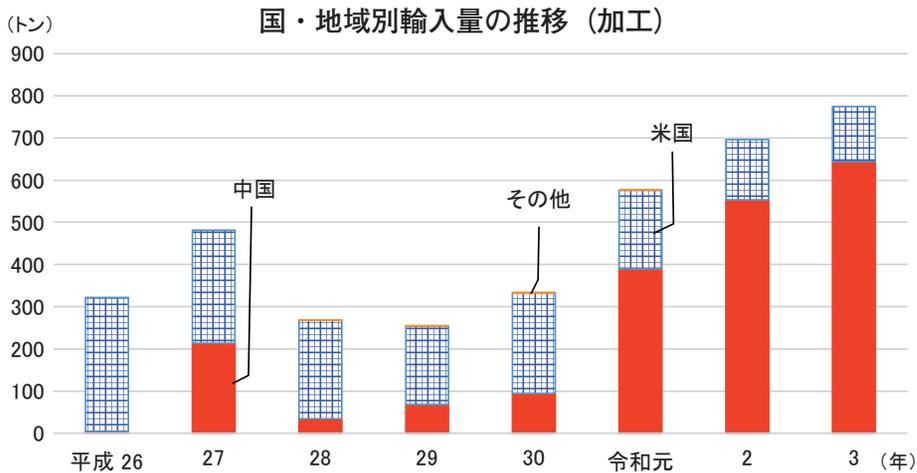
## 輸入量の動向

生鮮にんじんの輸入先国は、中国が大部分を占めるほかベトナムや台湾からの輸入も見られ、平成30年は国内産の不作により輸入量が増えた。中国産は太物が周年で輸

入され、主に加工・業務用として仕向けられている。また、カット加工されたにんじんの輸入量は年々増加傾向にあり、主な輸入先国は中国と米国である。



資料：農畜産業振興機構「ベジ探」（原資料：財務省「貿易統計」）  
 ※HSコード：平成28年まで「0706.10.000にんじん及びかぶ」、29年から「0706.10.010にんじん」

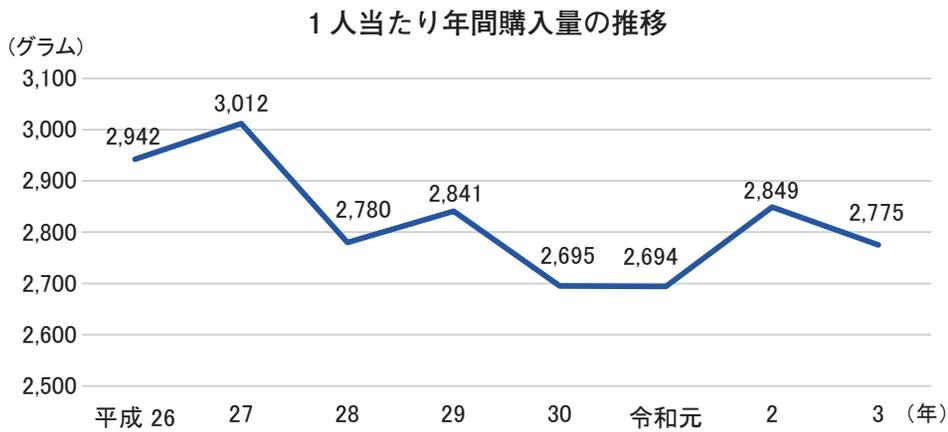


資料：農林水産省「植物防疫統計」  
 注：検査数量の数値である。

## にんじんの消費動向

にんじんの1人当たりの年間購入量は、2700~3000グラムの間で推移している。炒め物や煮物など和洋中、幅広い料理に使われるほか、その鮮やかな色からお菓子やジュースの原料としても人気があり、長期貯蔵も可能であることから消費は安定して

いる。家庭において欠くことのできない野菜のため、購入量の変動は比較的少ない。平成27年をピークに減少していたが、令和2年は2849グラムと増加し、コロナ禍で家庭内消費が多くなったことも一因と考えられる。



資料：農畜産業振興機構「ベジ探」（原資料：総務省「家計調査年報」）



\* 今月の野菜の「産地紹介」は、都合によりお休みいたします。